

鷹

工藤修也

外では草と土の匂いの混じった風が吹き
座っていてもびのびする雲が見て取れる

選ばれるよりも選んでいて

高いものであればその分傷つける

集られても気にも留めずに邪魔であれば追い払える

高く飛んで大きな羽根を落とすことはしない

低く飛び回ってひけらかすこともない

古くても新しくても満遍なく上書きする

硬くても柔らかくても関係なく爪痕を残す

もし私が鷹に生まれ変わったとしたらこのような鷹になれるのか

きつと体も小さく気弱な私は鷹になってもそれは同じだ

息苦しいのにだだっ広い世界から逃げて小さな森で

弱者の前では爪を光らせ強者の前ではそれを鈍くする

また違う生物に生まれ変われば満足できると想像する

あいつは鷹に生まれ変わっても同じだ

鋭く大きな爪を隠して飛び回ることができて

人間やその他の生き物は憧れを抱き

そのようなあいつこそ爪痕を残す

ずっと遠くから向けられているような窓からの光で

身につけている金属の鈍さが露わになる

甲高い声に呼応して私は聞き耳を立てた

彼は鷹になって大きな翼で飛びたいと言った

彼女は猫になってのんびり海を見ていたいと言った